

第二章 『失われた時を求めて』

一 梗概

『失われた時を求めて』はフランス語原文で三〇〇〇ページを超える大作であり、限られた紙数でその要約を与えてもきわめて大雑把なものしかできない。しかしこの小説の全体を貫く構成、作者自身の言葉によれば「交響曲」「大伽藍」のような複雑な構造を理解するよすがとして、やや無理を承知でごく簡単に作品の要約を試みてみたい。全部で七巻に分割された構成は必ずしもプルーストの意思に基づいて分けられたのではなく、出版技術上の要請（たとえば一つのまとまったエピソードが長すぎてあまりにも分厚くなるので二つの巻に分けたとか）に従ったものもあるが、一応、尊重して要約を試みることにする。

第一巻「スワ」 まず冒頭でいきなり、夜眠れずに半睡状態でベッドにいる語り手が登場して読者「名家の方へ」を驚かす。これは明示されていないものの、大人になった語り手がサナトリウム

で過ごしている時代のことである。療養所なので夜早く寝なければならぬのだが、寝つかれずにいるうちに、彼が過去に過ごしたおおよそ七つほどの部屋を思い出す。ついで彼はバカンスで過ごした田舎町コンブレーのある忘れられない思い出を語る。近隣に住むスワン氏が語り手の家を訪れた日、まだ幼い語り手は来客中にもかかわらず、母を無理やり寝室に呼び寄せ、いつも通り母の接吻をせがんだために家中の響ひびくを買ったのである。これはその気になればいつでも思い出せる意志的記憶の例だが、ここで語り手はもう一つの記憶、無意志的記憶の例を語る。以前、彼はパリで紅茶にひたしたプティット・マドレーヌ菓子を食べたときに、同じ体験をコンブレーでしたことを思い出し、そのことによってコンブレー全体の思い出がよみがえってきた体験を語る。物語はこうしてよみがえってきたコンブレーの全部を描写し始める。

まだ幼い語り手はよくレオニー叔母の家に滞在して、そこから散歩に出かけることがよくあったのだが、そのコースには二つあった。一つはスワンの家に向かうコースで、その道すがら、庭の生け垣の向こうからじつとこちらを見ているスワンの娘、ジルベルトに出会ったりした。もう一つはゲルマントのお城にまで行くコースで、この城には半ばおとぎばなしの主人公となっているジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバンの末裔まごであるゲルマント公爵夫人が住んでいて、語り手はペルスピエ医師の娘の結婚式のおりに彼女を見かける。

第二部「スワンの恋」

ここで物語は約一五年ほど昔に戻り、ジルベルトの父スワンがオデットの恋をして結婚するまでを語っている。社交界に出入りするディレッタントのスワンは、高級娼婦のオデットとヴェルデュラン家のサロンで会っていてもあまり好みではないので関心を引かれないでいたが、あるときちよつとした行き違いで会えなかつたことをきっかけに彼女に恋着するようになる。しかしオデットは浮気な女でフォルシュヴィルとも関係があり、彼をさんざんに悩ます。スワンはオデットとの交渉にかまけて念願の著作を仕上げることもできない。そして、恋の冷めたあと、彼女と結婚する。

第三部「土地の名、名」は土地の名についての夢想、そしてシャンゼリゼでのジルベルトとの子供らしい恋の様子が語られるが、この部分は、次の『花咲く乙女たちの蔭に』の第一部と一つのまとまりをなすべきものである。

第二巻「花咲く乙女たちの蔭に」 まず第一部の「スワン夫人をめぐって」はダイレクトに既述の「土地の名、

名」に接続するもので、ジルベルトの家にしだいに入り込んでいった語り手は、彼女が必ずしも自分を歓迎してくれないことを知って自分のほうから身を引く決意をする。しかしスワン夫人のサロンには出入りを続け、そこで作家のベルゴットと知り合う。次の「土地の名、土地」では、二年後に語り手はシルベルトとの恋の痛手も癒えて祖母と女中のフランソワーズを伴

ってバルベックに避暑に出かける。語り手は海辺で祖母の昔の学校友達であるヴィルパリジ侯爵夫人と知り合いになることから始まって、ロペール・ド・サン・ルー、シャルリュス男爵というように、ゲルマントの一族と知り合う。その後、語り手は浜辺で若い娘たちの一団を見かけるようになる。画家のエルスチールに紹介されて知り合ったアルベルチーヌ、アンドレ、ジゼールらはバカンスで来ているブルジョワの娘たちで、語り手は中でもアルベルチーヌに特に惹かれるものがあった。彼女としいに親しくなった語り手は、ホテルのアルベルチーヌの部屋で彼女に接吻しようとして、ベルを鳴らされる。

第三巻『ゲル マントの方』 この巻は語り手の一家がゲルマント家と同じアパートに引っ越すところから始まる。表題の示すように、ゲルマントの世界に語り手がしだいに入り込んでいくさまが主要なモチーフである。語り手はゲルマント夫人に紹介してもらおうと願い、夫人の甥に当たるサン・ルーに紹介を頼むために彼が駐屯しているドンシエールに出かける。サン・ルーとの交渉はその後も続き、パリに戻ったサン・ルーとその愛人ラシエルと会い、二人の波乱含みの関係に立ち会うことになる。ラシエルはかつて語り手が娼婦の家で会ったことのある女性であった。ヴィルパリジ侯爵夫人邸でのマチネでゲルマント一が終わったあと、二の第一章では祖母の病氣と死が語られる。続く第二章では語り手は念願かなってゲルマント公爵邸に招待され、そこでシャルリュスの曖昧な態度の意味がわからずに困惑したりするが、このころになるとゲルマント夫人に対する熱も冷めて、希望の実現があまりうれしく感じられないのであった。それというのも、彼はアルベルチーヌに再び関心を向けるようになったからである。

第四巻『ソドムとゴモラ』 ソドムとゴモラはいうまでもなく聖書に登場する同性愛の町であり、これまで作中に取り上げられることになる。『ソドムとゴモラ』一では、語り手のアパートの一階で仕立て屋を営むジュピヤンとシャルリュスが中庭で偶然出会い、見つめ合い、動物のように求愛の行為をし、そして二人で部屋に入っていくさまを描いている。続いて、二では語り手はゲルマント大公妃邸に招待される。次いで彼は二回目のバルベック滞在に出かけるが、初日にホテルの部屋で靴のひもを結ぼうと身をかがめたとき、かつてこの部屋で過ごした祖母の思い出が激しい勢いでよみがえってきて、祖母の死を本当に実感するのであった。その一方、シャルリュスも再びバルベックに現れ、近くのラ・ラスプリエールの別荘を借りて夏を過ごしているヴェルデュラン家に、ヴァイオリン弾きのモレルとともに登場する。このようにソドムの愛が露出してくる一方、ゴモラも浮上してくる。それは他ならぬアルベルチーヌで、彼女がカジノでアンドレと胸をくっつけ合って踊っているとき、彼女らは陶酔の絶頂にあると医師のコタールに指摘されて、語り手は疑念を抱くのだった。しかし

一方では、彼はアルベルチーヌに早くも倦怠を感じることもあり、一時期は結婚も考えたことが気違いぎたように思えるのだった。こうして彼がアルベルチーヌとの関係を清算しようとした決意した瞬間に、アルベルチーヌは、自分がかつてトリエステでヴァントウイユ嬢の女友達に半ば育てられたも同然であるという。この話を聞き、かつてコンブレリーのモンジュエヴァンで、ヴァントウイユ嬢と女友達の同性愛のシーンを目撃したことがある語り手は、嫉妬のあまり急遽彼女をパリに連れ帰り、ヴァントウイユ嬢の女友達に会わせぬように家に住まわせることに決める。

第五巻『囚われの女』

この巻はタイプ原稿には「ソドムとゴモラ三の第一部」という副題が与えられていたこともあり、前の巻に続いて同性愛の世界を中心に展開する。語り手はアルベルチーヌとパリで共同生活を始め、いつも彼女の存在を隣の部屋に感じながら暮らしていくようになる。彼女は「囚われの女」だが、実際には語り手のほうが病弱のために家にこもりがちであり、彼女のほうはアンドレに付き添われて散歩に出たりして、語り手の嫉妬をおおっている。このあと、語り手はヴェルデュラン家の夜会にヴァントウイユの七重奏の初演を聴きに行く。これはシャルリュスがモレルを社交界に押し出すために仕組んだ夜会だが、客たちがヴェルデュラン夫妻を無視したために夫妻の怒りを買ってしまう。夫妻は、ちょうどかつてスワンとオデットとの仲を最後は邪魔したように、モレルにあらぬことを吹き込んでシャルリュスとの仲をだめ

にしてしまう。家に帰った語り手を待ち受けていたのは、アルベルチーナに対する嫉妬の地獄だった。彼女の言動のすべてが語り手の疑念と嫉妬を誘発することになり、彼は耐えがたい思いをする。しかしその間にも、語り手のヴェネツィアへの旅立ちの想いはいやましに募るばかりで、そのためにはすでに強い倦怠も感じているアルベルチーナと別れねばならないと考える。しかし彼女に別れを切り出そうとした朝、彼が起きてみるとアルベルチーナは荷物をまとめて出奔しゅっぺんしていただった。

第六巻『消え去った』 この巻は「ソドムとゴモラ三の第二部」という副題が一時期付けられているアルベルチーナ」たことに示されるように『囚われの女』と対をなすもので、アルベルチーナの逃亡と死、そして語り手の苦しみと忘却を主要なモチーフとする。

アルベルチーナの逃亡にショックを受けた語り手は別れようとしていたことなどきれいに忘れ、彼女を帰還させるべく、サン＝ルーを使者として、アルベルチーナの伯母のボンタン夫人に働きかける。またそれと並行して彼女と手紙をやりとりし、高価なロールスロイスの車を餌に、何とか戻らせようとする。しかしボンタン夫人から知らせがきて、アルベルチーナはトゥーレーヌで乗馬中に馬から落ちて死亡したのであった。「できれば戻りたい」という彼女の手紙が配達されたのは死の知らせのあとだった。彼は忠実な人物エメをやつてアルベルチーナの行状を調べさせると、やはり同性愛の行為が次々と出てきて、彼女の死後も語り手を嫉妬で苦しめることになった。

しかしそれでも苦しみは少しずつ和らいできたが、彼女の思い出を忘却していくには三つの段階が必要であった。まずフォルシュヴィル嬢の出現で、彼は最初この娘が誰であるかを知らずに強い好奇心を抱くが、すぐこれがジルベルトその人と気がつく。第二の段階は半年ほどあとに行われたアンドレとの対話で、それによってまたアルベルチーナの過去の行状がある程度明らかになるが、真相は闇の中だった。最後の段階は語り手のヴェネツィア滞在中に彼はアルベルチーナを思い出させる幾つもの要素に出会う。その中の最大のもは彼女の着ていたフォルチュニーの衣装の元になったカルパッチョの絵『グラドの司教』であったが、これを見て彼女のことを思い出しても、彼はもう何の感興も湧かないのであった。

第七巻『見い』 この『失われた時を求めて』の最終巻はコンプレのタンソンヴィルのジルベルトだされた時』ト邸への滞在の続き、大戦下のパリでのシャルリュス、そしてゲルマント大公妃邸のマチネの三つの部分に分かれる。本当の意味で最終巻の表題に合致するのは大公妃邸のマチネである。

タンソンヴィルで語り手はジルベルトから、かつてはまったく正反対の方角と思っていたスワン家の方とゲルマントの方が意外な近道でつながっていると知らされ、二つの方向が決して対立したものでないことに思いを致すのであった。次いで彼はゴンクール兄弟の日記（これ自体ブルーストによる模作）を読み、芸術作品がもたらすものはこの程度のものかと懐疑的な気持ちになり、また自己の才能も疑う。その後彼は病気を治すために療養所に入り、一九一六年まで滞在する。戦時下のパリに戻った彼がドイツの飛行機の爆撃を避けようとして飛び込んだホテルはジュピヤンが経営する曖昧宿で、その一室ではシャルリュスが鞭打たれているのであった。

数年後、療養所から再びパリに戻った語り手はゲルマント大公妃邸でのマチネに招待されて出かけるが、邸宅の中庭で不揃いな敷石につまずいた瞬間、ヴェネツィアで同じ体験をしたことを激しい喜びと一緒に思い出す。中に入って演奏会が終わるのを図書室で待っている間にも、固いナプキンの感覚、スプーンのぶつかる音によって、かつてのプティット・マドレーヌの体験と同じ喜びを味わう。そこで彼はこの本当になまなくよみがえってきた過去を芸術作品の中で表現すればよいことを悟り、彼の書くべき小説の構想を得る。すなわち自己の浮薄で、無意味に見えた人生もそのまま小説の素材となるのであり、大事なものはそうしたささやかな生の軌跡を見る目なのだと悟る。サロンに出ると多くの知り合いがそこに集まってきている。彼の人生を横切っていた人々がこことごくコンプレの出身であるのと同じように、かつて語り手の人生にまじわったほとんどの人々がここに集まってきたのである。しかし彼らは皆ひどく老いて見分けがつかないほどになっていた。その中で語り手の注意を引いたのはサン＝ルーとジルベルトとの結婚によって生まれた

サン＝ルー嬢であった。彼女はコンプレにあった二つの方角を統一しているばかりでなく、スワン家とゲルマント家のすべての人脈を統合しているのだ。こうして語り手は自己の書き上げるべき作品についてのアイデアを得る。それは時の破壊力と時のもたらす至福をめぐる小説であり、まさにこれから彼は、自己の残り少なくなった時と競争で書き上げようとする。こうして「時」という言葉で始まり（長い時間、私は……）、そして「時」という語で締めくくられる小説は終わる。